

コンブとかんぴょうと保育所 まそがきにかえて

東京の西、某大学キャンパスの雑木林のなかに、回帰船保育所はある。落ちついた茶色い屋根の園舎には、子どもたちの声が豊かに響く。創られてもう半世紀近い。時を経て、保育所は地域にとけ込み、子どものためのゆるぎない場所となった。

——けれどもうずいぶん前、私がそこに加わった頃、回帰船は「保育所」と名のりながらも、今のような『子どものための施設』ではなかった。誤解を恐れずに（なにしろ後から飛び込んだのだから、知らないことも多い）言うと、むしろ「女のための場所」、または「寄る辺ないおとなたちの場所」。わたし自身をどう生きるのかを、自分たちの手で模索するため。

保育所を創ったのは、その実践のひとつなのだと思う。ひとつだけ、保育所は回帰船の核となり、人と人とを結びつけた。

中心には、忘れ難い面がまえの女たち——「未熟でも自分で考えて、ありのままに生きなきゃ。批判なんて恐れない。社会も男も、ぐいっとこっちへ呼びこむのよ!」——言葉

にしたらこんなふうな。

私たちの命の渦に引き寄せられ、保育所にはいろんな人が関わった。子どもの有る無しは関係ない。障がいとかお金とか、なにかの有る無しにかかわらず、多くの人が訪れて、子どもたちと共に過ごし、自分の気持ちを手渡し合った。わたしもその中のひとり——。

わたしはそこで、自分の子ども時代には得られなかった、人の思いやりを得、子どもたちから、無条件に愛することを教わった。根無し草だったわたしに根が生え、少しずつ葉を伸ばせたのは、回帰船保育所の懐に抱かれたからだ、と思う。

保育者として、夢中で日々を送り、気づいたら十八年が経っていた。わたしは十八年を経た大人としての足腰を固め、保育所を離れた。今でも、ここに来ようと決めたときのことを覚えている。

保育所に初めて遊びに行った、帰り道でのことだ。駅へと続く古い商店街の一角に、お茶屋があった。その店先の四角いガラスケースの中に、黒々とした幅広い折りコンブと、きりっと乾いたかんぴょうが売られていた。私は足を止め、ガラスケースの中に見入った。コンブとかんぴょうは、ただ、そこにある。うろろろ求めなくていいのだ。

「よし、この保育所に加わろう」

わたしはコンブとかんぴょうに励まされ、新しい一歩をはじめた。